

# 文章表現から見た保育科学生の問題点

—表現の特徴と思考力の関係—

佐藤 達全

## Some Problems of the Written Language of the Students of the Nursery Course

—The Relation Between the Distinctive Features of  
Verbal Expression and Their Thinking Faculty—

Tatsuzen Sato

### Abstract

Having read the writings of the students of the nursery course, I have often noticed some particulars as follows: misuse of particles such as objective 'o' and 'ni', sentences with improper use of the subject and the predicate, to say nothing of wrong words or false substitute characters.

Having indicated these matters before, in this thesis I have observed in my students' compositions such characteristic expressions of schoolchildren as 'ureshikatta desu' and 'gannbaritai desu' or 'ni nattara iidesu', which appear now and then and where students seem to me to be outsiders. Therefore I inquired into the issues hidden here.

**Keywords:** Sentence expression ability, Basics scholastic ability, Guess expression, Insight, Composition guidance method

**キーワード:** 文章表現力, 基礎学力, 推理表現, 洞察力, 作文指導法

## 1. はじめに

大学生の基礎学力低下が指摘されるようになって久しいが、その有効な対策がなかなか見いだせないまま今日に至っている。学生の書いたレポートの誤字やあて字を拾い出せば次々に見つかり、あらためて問題にされることもないほど、状況はひどくなってきた。しかしこの問題は、大学生の学力が低下したのではなく、「勉強しない高校生」や「学力のない高校生」でさえも大学や短大に入学する時代になったことに原因があると考えべきではないだろうか。

少子化傾向はとどまる気配を見せず、数字の上

では大学全入時代になってきた。バブル景気が崩壊し、日本も実力主義社会に突入したといわれるようになったが、「大学に行きたい」「大学に行けばなんとかなる」という風潮は未だ消えていない。勉強をする意欲はないが、さりとて就職もしたくないので、とりあえず入れる大学に入っておこうという高校生は少なくないと言われる。それに対応するように、学生確保のために推薦入試や指定校制度を導入する大学も非常に多くなっている。こうしたことが、大学生の学力低下をひきおこしている大きな要因であろう。

四年制大学ですらそのような状況であれば、地方の短大に入学してくる学生の学習意欲がなおさ

ら心許ないものであることは容易に想像できよう。ちなみに、本学保育学科2年生の一週間の勉強時間を調査したところ(10月上旬に実施)、253人中、228人(90パーセント)が「ゼロ」であった。残り25人の内訳は、週に20時間という学生が1人で、あとは1時間から3時間という結果である。

分数の計算ができない大学生や、中学校で習う漢字が書けない大学生が話題になったこともある(注1)。こうした状況をふまえ、入学予定者に対して入学前の学習課題を指示したり、入学後に高校の授業の補習を行ったりして、大学の授業を理解できるようにするためのさまざまな対策を講じる大学が増加してきた。

このことは、旧・国立大学でも無関係ではないようである。その一例として、2年生の必修科目「創成プロジェクト」の授業で「国語力向上と発想力を豊かにする教育」に取り組んでいるという岡山大学工学部機械工学科の興味深い事例が紹介されていた(「大学生に初歩文章学」読売新聞 2005年3月2日付)。

この授業を担当する塚本真也教授は精密加工学が専門であるが、その一方で、文章の書き方を初歩の初歩から教える授業「技術文章学」に10年前から取り組んでいるという。使用するテキストには「飛行機の専門家によれば、その墜落事故はタイヤのバンクが原因であった」(誤字修正、初級)「巨大地震の発生が懸念される東海エリアの地核は、4枚のプレートが出(会って、合って、遭って)いる特殊なプレート境界構造である」(同訓・同音語句の選択、初級)といった問題が並んでいる。さらに、送りがなや句読点の使い方、「段落の冒頭は1文字空ける」といった指示まであり、宿題も出される。その上で、図表の作成やデータの強調法など、論文作成に役立つ内容も授業に盛り込み、実際に文章を書かせることに力を入れてきたことが紹介されている。

塚本教授が作文指導に取り組むようになったのは、卒論指導で意味不明な文章に閉口したからだ

そうである。1994年の新入生138人が書いた原稿用紙1枚のレポートを調べた結果、半数以上に、「講義(講義)」「微細(微細)」などの誤字や送りがなのミスが見つかったことがきっかけになっているとのことである。こうした対応をすることに、当初は教員の反対があり、学生も反発したそうだが、塚本教授は「研究成果を伝える力がないと、せっかくの研究も価値がなくなる」と繰り返して反対意見を押し切った。

その成果ははっきりと現われてきた。2002年度の検証では「技術文章学」開講当初に半数近くもいた誤字や作文のルール違反を犯す学生が、半期の授業が終わる頃には1.2%に減ったことが報告されている。

このような試みは、他の国立大学でも行われているという。独立行政法人メディア教育開発センターの小野博教授らの調査では、国立大4校、私立大18校の今年度の新入生約5,900人のうち、国語力が中学生レベルと判定された学生が国立大で6%、私立大で20%いた。中には43%の私大もあったという。そこで、国語力向上をめざして「日本語技法」「日本語表現法」「日本語技法」「日本語表現法」といった科目名の授業が、高知大、富山大、静岡大、豊橋科学技術大、九州工業大など、他の国立大でも行われているとのことである。

先の岡山大学の例では、「作文は、中学3年の夏の宿題で書いたかな。高校時代は1回も書いていない。国語が嫌いでした工学部に入った」という学生の言葉が紹介されているが、塚本教授の授業を受けた後には「独創的な研究も、的確な表現力がなければ評価されない。技術者には、どちらも同じくらい重要であることを教えられた」といった感想が記されている。

## 2. 保育科学生の文章表現の実態

このことは、「子どもが好きだから」というだけで、幼児教育や保育の意味をほとんど考えることなく入学してくる本学保育学科の学生にもそのま

ま当てはまると思われる。保育科学生の特徴としては、「幼稚園や保育園の先生なら、子どもと遊びながら楽しく仕事ができる」と考え、音楽や絵画制作や運動遊びといった実技関係の活動ばかりをイメージする傾向が強い。実技が保育の現場で重要な意味を持っていることは言うまでもないが、その根底に子どもの身心の発達を的確に理解して受けとめる理論がなければ単なる「お遊び」で終わってしまうであろう。

ところが、残念なことに学生の文章を読む限り、そうした意識を持っているとは言い難いのである。筆者はこれまで、「国語表現演習」の授業を担当し、学生の文章表現力、ひいては基礎学力に問題があることを感じてきた。そのことはすでに「保育科学生の文章表現力について」と題して論じたことがある(注2)。その時は学生が書いた文章を紹介しながら、どのような間違いが多いかを指摘するとどめたのであるが、本論考ではそれを受けて、きわめて重要と思われる問題について考察したいと思う。

その前に、あらためて学生の文章の実態を紹介しておこう。高校卒業までに教科書を読み、レポートを書いたり感想文を書いたりしているはずなのに、あいかわらずしっかりと文書表現力が身につけていないのである。文章の基本は主語と述語の関係であるが、両者が対応していない文章が少なくないのである。

#### (1) 主語と述語の関係

\* 私の弱点を克服する方法は、まずその弱点を自分なりに認めることが大事だと思います。

(「弱点を克服する方法は」と書き始めたのなら、「○○です」と結ばなければならない)

\* 虐待をしてしまう理由でよく聞くことは、若い母親で育児のことを知らず、育児不安になり、周りに家族がいなく育児の相談ができなくて子どもに熱湯をかける、食事何も与えない、暴力をふるうなど、幼児に虐待をしてしまうよう

です。

(「よく聞くことは」という主語に「虐待をしてしまうようです」という述語は対応しない)

\* 十年後の私の理想は、結婚して子どもを育てていて、安定した生活を送っていたい。

(上と同じく「理想は」という主語に述語が対応していない)

#### (2) 混乱した表現

\* 先生方も夏休みでしたので、手が足りないから是非と快く受け入れてくれ、お手伝いさせていただきました。

(前半が「くれ」で後半が「いただく」となっていて、表現の基準をどこにおいているか統一されていない。また、先生に対して前半の「くれ」は失礼だが、後半は「いただきました」と謙譲表現になっている)

\* 大きな子が小さい子を思いやる気持ちがあり、声をかけたり異年齢関係なく遊ぶことも必要なんだと思いました。

(読点の前の「あり」では、その後うまくつづかない。並列の「たり」の用い方が適切でなく、「必要なんだ」は話し言葉)

#### (3) 「てにおは」の問題

主語や述語の関係がしっかりと表現できないだけでなく、助詞の正しい使い方が身につけていない学生も見られる。

\* 私の一番印象に残ったことは、就職活動で保育園に訪問したときのことです。

(ここでは「保育園に」ではなく、「保育園を」のはず)

\* 私が幼稚園に希望しています。

(主語は「私が」でなく「私は」が適切。また、「幼稚園に」ではなく「幼稚園を」のはず。ただし「幼稚園に就職を」ならよいが)

\* 年内には決まらないかもしれませんが、卒業までに就職先を決まればよいと思います。

(ここは「就職先を」ではなく「就職先が」の  
はず)

\* 短大へ入学し、幼稚園・保育園・施設を実習しました。

(初めの「短大へ」は「短大に」が適切、また  
「施設を」でなく「施設で」のはず)

\* 実習日誌を書いているとき、自分の知っている  
語彙の少なさに反省しました。

(ここも「少なさに」ではなく「少なさを」で  
あろう。語彙の少なさに気づいたことは評価  
できるが、その他にも考える点があるのでは  
ないだろうか)

\* 紙飛行機を作ったのですが、線にきれいに折る  
ことやどこを持って軽くとばせるかなどがまだ  
理解できてないんだなと発見することができま  
した。

(「線に沿って」ならよいが、この「に」は「を」  
ではないだろうか。また、「理解できてないん  
だな」は話し言葉。さらに「理解できてない  
んだなと発見することができました」の「と」  
はおかしい)

\* 人との信頼関係に築くことができ、とてもよい  
経験ができたと思います。

(これも「信頼関係に」ではなく「信頼関係を」  
であるはず)

\* 保育士をめざしている私には、人見知りをす  
ることを克服したいです。

(ここでは「私には」でなく「私は」「私として  
は」という表現がよいであろう。「したいです」  
もおかしい)

\* 住宅事情や養育費・教育費が大きな負担が出生  
率の低下につながっていると思います。

(「教育費が」ではなく「教育費の」でなけれ  
ばならないはず)

#### (4) 基本的な表現の問題

ここ数年、助詞の「は」「が」「を」「に」などの  
使い方がおかしい文章が多くなってきた。小学生

程度の文を書く基本的な知識を十分に身につけて  
いない学生が増えているのではないだろうか。

\* 一人だけに集中せづ、全体の流れを考えた行動  
がとれるようにしたいです。

(打ち消し表現は「ず」のはず。また、これは  
本論考のテーマなので、後で取り上げるが、  
「です」には希望をあらわす「たい」は接続  
しないので、「したいです」という表現は文法  
的に誤りのはず)

\* 責任のある立場の部長は最初あまりやりたくは  
なかったのですが、いざ自分でやってみると大  
変なこともたくさんありましたが、自分自身が  
大きく成長できたように感じます。

(「が」という逆接を意味する助詞は何度も使  
わない方がよい)

\* 今までの私は、何かに意識しても諦めていまし  
ましたが、卒業し社会人になって責任をもって何も  
できないのはいけないと思い意識し、やれるよ  
うにしていたらできる自信ができたのでこれが  
成長できたところだと思います。

(「今までの私は」という主語に対する述語が  
適切に表現されていない。「思い意識し」とい  
うように二つの動詞はつながらない。さらに、  
表現そのものが全体的におかしい)

\* 私のダンスを見てくれた人が、何かを感じても  
らえれば嬉しいです。

(「見てくれた人が」に対して「感じてもらえ  
れば」はおかしい)

\* 虐待とよく聞くけど、子どものケアももちろ  
ん援助しなくてはいけないけど、親の話を聞い  
たり、育児だけに専念しないで時間がある時、  
うまく調節できるとよいと思う。

(言いたいことは想像できるが、文章の組み立  
てが全体的におかしい。また、「けど」は文章  
に書く言葉ではないはず。さらに、「聞いたり」  
は並列の表現だが、どの部分と並列している  
のかがわからない)

(5) 同じ語のくり返し

このような状況であるから、同じ言葉を何度も使うことを全く気にしない学生も少なくない。

\* 今年の夏休みは私にとって学生最後の夏休みでした。

(文章を書く際に、頭に浮かんだことを整理せずにそのまま書いてしまうからであろう)

\* 先進諸国が大きな問題として考えていかなければならない問題が少子化です。

\* このように成長できたのは、一人暮らしをしたからだと思います。一人暮らしだと誰にも頼ることができず、何でも一人でやらないといけないので、このような力をつけることができたのだと思います。これからますますいろいろな壁にぶち当たると思います。どんなときでも前向きな姿勢でぶつかっていかうと思います。

(「一人暮らし」を続けて使っている。さらに四つの文章の結びがすべて「思います」となっている。文章を書く時に、おそらく推敲するという意識がないのであろう)

\* 保育者として子どもたちと接する機会を多く持つ私達としては、避けて通れない問題だと思います。身近で起こるか起こらないかは別として、常に忘れてはいけないことだと思います。子どもたちの変化を敏感に感じ取ることが事件の大小につながるのではないかと思います。そして幼児虐待が起こらないよう保護者の方達とたくさん話をすることが大切なのではないかと思いました。悩みを聞いてあげることによって不安が少しでも減るのではないかと思います。

(この文章でも、文末はすべて「思います」で、自分が考えたことは「思います」としか表現する方法を知らない例である)

\* 子どもたちの多くは、虫が大好きで、虫に対する関心が強いと思います。その気持ちを伸ばしていけるよう、私自身が虫に関心を持つ必要があると思います。子どもと共に、虫や自然とふれあい、感性豊かな保育士になれるよう頑張り

たいと思います。そのために、苦手な虫を克服したいと思います。

(これは前論考でも指摘したことであるが、学生の文章にはほとんど代名詞が使われていないことに気がついた。これもその例で、「虫」が5回も登場している。可能なところは省略した方が文章がすっきりする。そして、文末はすべて「思います」となっている)

\* (夏休みのできごと) 何かと忙しい毎日でしたが、その合間を使い旅行へも行ってきました。二、三年ぶりに家族・親戚で新潟へ行きました。久しぶりに海にも入ったのですが、あいにくの雨。しかし、雨の中海に入り遊びました。海に入るのも久しぶりでしたので、とてもよい思い出になったと思います。

(「行く」「雨」とともに一方は省略できるはず。また、「忙しい」は送り仮名がおかしい。「雨の中海に入り遊びました」では、「雨の中」の次に読点を入れるか、助詞の「を」を入れた方がよい。「入り遊び」のように動詞の連用形をつなげる学生が少なくない)

\* 今年の夏休みは学生生活最後の楽しい夏休みというより、就職試験の講座や部活、実習、就職活動と毎日慌ただしい夏休みでした。

(それほど長くない文の中に「夏休み」が3回も使われている)

(6) 同音異義語・誤字

次に示す同音異義語や同訓意義語は、学生が書く誤字の中でも最もポピュラーなものである。しかも、「表意文字」である漢字は意味を考えて用いなくてはならないのだが、そのことを認識している学生はそれほど多くない。

\* 子どもの気持ちを組みとっていきたいです。

\* 私は幼稚園の頃からピアノを初めました。

(「初め」は動詞として使わないことを知らない学生も少なくない)

\* 私は実習に行って、子どもの以外な面をたくさ

ん発見しました。

\*十分に準備をして望んだ実習でしたが、緊張してしまい、うまくいかないことがたくさんありました。

(ひとつ前の「以外」と「望んで」は間違っ  
て用いられる漢字の双璧ではないだろうか。し  
かも、何度指摘しても、半期の授業が終了す  
るまでに改善されない学生もいる)

\*私は手遊びが得意です。

\*嫌いな食べ物もあったと思いますが、残さず食  
べることは以外と難しいので、関心ばかりです。  
(「関心をもつ」と「感心する」の使い分けが  
できない学生も少なくない)

\*この問題は、国が改たな制度を作ることをし、  
指導・援助していくなかで解決していかなけれ  
ばならないと思います。

\*毎日が新鮮で、こんなに楽しい場所で働きたい  
と新たに思いました。

(「改める」と「新た」の意味の違いがわから  
ない学生も多い)

\*今日は台風で天気が悪かったので子どもはあま  
り来ないかと思っていましたが、意外に数が多  
く、親たちも急がしいのだなと思いました。  
(「急ぐ」「忙しい」はどちらも内容的には似て  
いるため、「急がしい」と送り仮名をつけて使  
う学生が少なくない)

#### (7) 並列「たり」について

学生にかぎらず、忙しい現代人は並列の「たり」  
も1回に省略せざるを得ないのだろうか。最近の  
NHKのニュース原稿(テレビ・ラジオ)でも、正  
確に表現されていない場合がきわめて多いことが  
気になる。学生の場合は、並列させるものそれぞ  
れに「たり」をつけた正確な表現をしている例は  
稀である。

\*音楽遊びはリズム感がよくなるだけでなく、身  
体の発達につながったりまた感受性が豊かにな  
ると思うからです。

(正しくは「つながったり感受性が豊かになっ  
たりすると思うからです」と表記しなければ  
ならないはず)

\*私はすぐに話しかけることができず戸惑いまし  
ましたが、少しずつ話しかけたり目と目をあわせな  
がらゆつくりと接していきました。

(これも「話しかけたり目と目を合わせたりし  
ながら」と表記しなければならないはず)

\*今日は紙芝居をやらせていただいたのですが、  
緊張してしまい、止まったりあまり大きな声が出  
せなかったので、子どもたちは楽しく見てく  
れたか心配です。

(ここでは「たり」だけでなく、「やらせて」と  
いう表現を「させて」としなければならず、  
「子どもたちは楽しく見て」は「子どもたち  
が」でなくてはいけない)

#### (8) 敬語に関して

基本的な文章の書き方が身につけていないので  
あるから、敬語や謙譲語が正しく使えない学生が  
多いことも容易に想像できよう。

\*実習で感動したことは、先生方がとても優しく、  
いろいろなことを教えてくれました。

(先生に対して「くれました」はおかしい。ま  
た、「感動したことは」という主語なら、「○  
○です」という説明文にしなくてはならない  
はず)

\*一人一人の個性や特徴を丁寧に教えてくれまし  
た。

\*先生方も高く評価してくれたので、自分ではと  
ても満足でした。

\*先生方から大切なものをたくさん教えてもら  
いました。

\*私が実習させてもらったところは、○○でした  
が、園長先生もすごく優しく子どもたちのよう  
すをいろいろ話してくれました。

(「もらう」も「くれる」も先生に対して用い  
る表現ではないはず)

(9) 「です」と「である」

これは学生にかぎったことではないが、ひとつのテーマで書かれた文章の中に、敬体（です・ます）と常体（である）が混在している場合も少なくない。

\*昔は「生めよ、増やせよ」と言われ、子だくさんであることは珍しいことではなかった。しかし、女性の社会進出に伴って女性の未婚率が上昇したことによって少子化は避けられなくなっています。

\*機能回復の訓練は子どもにとっては大変だが、前よりよくなっているのを見ると、頑張ってほしいなと思いました。

（「です・ます」と「である」はどちらも正しい日本語の表現法であるが、それぞれの文体の持つ響きが異なるので、文の内容や読み手によって使い分けなくてはならない。ただし、二つの表現をまぜて使ってはいけない。さらに、書きことばとして「ほしいな」はおかしい）

(10) 説明文について

次に紹介する「説明文」は、主語と述語の対応に関して学生の最も苦手とするものの一つである。もっとも、この表現も学生にかぎらず正確に表現されない場合が少なくない。

\*私が考えることは、女性が安心して子どもを育てるには、幼稚園や保育園や施設などの子どもを安心して預けられる所をもっと増やしていけば、女性にとって子どもを産んで育てるのは可能ではないかと私は思います。

（「考えることは」という主語に対しては、「○○である」という述語が必要）

\*私は卒業したら保育士か幼稚園教諭の仕事に就きたいと思っています。その理由のひとつは実習を通して子どもたちと一緒に遊ぶことの楽しさ、教えることの大切さを直接学ぶことができ、とてもやりがいのある仕事だと思いました。

（「理由のひとつは」という主語に「思いました」という述語はおかしい）

\*大好きな先生とゆうのは、優しい時は優しく厳しい時には厳しく、いけないことをしたらしっかりと注意をし怒ってあげるのはもちろんその先生にしかないオーラというような独特の雰囲気のような、そういうものを持っている先生になりたいと思います。

（「大好きな先生とゆうのは」という主語で始まりながら、いつの間にか「なりたいと思います」という自分の希望を表現する述語になってしまった。また「ゆうのは」とは書かないはずだが、学生の中にはこうした表記をする例が時々見られる）

\*なぜ私がこの本を薦めたいと思ったのかというと、この本を読んで子どもの頃に親からたっぷりと愛情を注いでもらうことが大切だと思いました。

（「なぜ思ったのかという」と理由を示す主語には「○○だからです」という述語を用いなければならないはず）

\*自分の短所を直すために最近始めたことは、言われたことを何でも書くようにしています。

（「始めたことは」という主語に対しては「○○です」という述語が必要）

(11) 話し言葉

中には「話し言葉」のままで文章を書いてはいけないことを知らない学生も少なくない。もちろん「話し言葉」と「書き言葉」の区別ができなかったり、書き言葉に直せなかったりという学生もかなり多い。

\*言葉が話せない子でも、どの先生が担当かと言うことをちゃんとわかっていました。

（「ちゃんと」は話し言葉）

\*入学した時は、はっきりと保育士になるという気持ちだったんですけど、学校に通っているうちに気持ちが変わってきたんです。

(「だったんです」や「けど」「きたんです」は文章に書く言葉ではない)

\*レポートの提出が遅れてすいませんでした。

(メモを添えることもなく遅れたレポートだけを研究室に置いていく学生よりも好感が持てるが、ここまでできるなら「すみませんでした」と書くことも覚えてほしい)

## (12) 呼応関係

\*なぜ、同じ世界に生まれながら、国によってこれだけ子どもに対する大人・政府からさしのべる温かい手、生活の確保・保護が違うのかと思います。

(「なぜ」には「だろう」「でしょう」という表現が対応する)

## 3. 問題の指摘

これまで紹介したように、学生が書いた文章の実態は基礎学力の低下の問題として見過ごせないことではあるが、こうした文章を見ていて保育科の学生にとってもっと深刻な問題があるように思われてならない。前回の論考でも指摘だけはしておいたが、それは次の4点である。

- ①推量表現がほとんど用いられていないこと。
- ②代名詞で表現することがほとんどないこと。
- ③「楽しかったです」といった、小学生の作文に見られる表現がきわめて多いこと。(「です」は体言や一部の助詞に接続する語)
- ④「……できたらいいです」「……になったらいいです」といった他人事のような表現が非常に多いこと。

ここから何が見えてくるのであろうか。まず、推量表現が用いられていないということは、具体的な「もの」や「現象」には目を向けても、見えていない部分を推し量ろうとする意識がないことを意味している。保育という営みにとって、子どもの表情やしぐさからその心を覗くことはとても大切である。そのうえで、ひとり一人に適切な働

きかけをしなくてはならないはずである。

また、代名詞を用いないことも同様で、いつも具体的な「もの」にばかり目が向いていることを現しているのではないだろうか。

さらに気になるのは、ほとんどの学生の文章に「楽しかったです」「嬉しかったです」といった表現が頻繁に見られることである。これは、常体で書いた場合には表面化しないのだが、現在の保育科の学生の本質を考える上で重要なポイントと考えられる。小学生の作文では「楽しかったです」という書き方は日常的である。次にその例を示してみよう。(引用は学習研究社『作文教室』より)

### [例文1 =母の日] (小学2年生)

きのおは母の日でした。おかあさんにカーネーションの花おおくりたいと思いました。

夕がた、花やさんえ行ったら、ぼくのおこずかいでわすこしたりなくて、かえませんでした。

それで、ぞおかのカーネーションを作って、おかあさんにおくりました。

おかあさんわ、とてもよろこんで、

「てっちゃん、ありがとう。すてきなカーネーションね。」

とって、すぐに花びんにさしていました。

ぼくわ、とてもうれしかったです。

この文で、「きのお」「花お」「花やさんえ」「おこずかいでわ」「ぞおか」「おかあさんわ」「ぼくわ」の表現が誤りであることは指摘されているが、「うれしかったです」は訂正されていない。

### [例文2 =わたしのたからもの] (小学2年生)

わたしのたからものは、こんのヘヤーバンドです。かぞくで大きかに行ったとく、おばあちゃんがかってくれたものです。

そのとき、くろとこんとみどりがありました。こんをえらんだのは、青っぽい色がすきだからです。



わたしは、ヘヤーバンドをすると前がよく見えるから、まい日しています。

それに、ヘヤーバンドをしていると、おとなっぽく見えるのも、気に入っています。

わたしは、もっとかわいく見えるように、ヘヤーバンドに花のゴムをつけます。つけるところを上にしたたり、いちばん下にしたたりしてくふうします。そうすると、かわいいヘヤーバンドになってうれしいです。

いつまでもつけていたいです。

「うれしかったです」や「つけていたいです」といった表現は6年生の文章にも見られる。

#### [例文3＝動物を守る] (小学6年生)

みなさんは、バドミントンをしたことがありますか。

わたしは、四年生の時にはじめてバドミントンクラブに入りました。クラブに入って二か月たったなら、友だちとの打ち合いがとても長く続くようになりました。試合の方法もわかるようになって、また、五年生や六年生でもこのクラブに入りたいと思いました。それで、六年生になった時、また、バドミントンクラブを希望しました。

クラブに入ったばかりのころは、ラケットをにぎっている手にまめができたり、サーブを打ってもシャトルがネットをこえなかったり、空ぶりをしたりしました。でも、少しずつ、じょうずになってきたのでうれしいです。

クラブの活動では、いくつかの打ち方の練習をしたり、二人組で打ち合いをしたりします。二人組の打ち合いがいちばん楽しいです。

ラケットにシャトルがうまく当たると、スパツ、シャツ、と音がしてとても気持ちがいいですよ。

風をきって、シュッシュッとラケットが動くとはどんどんじょうずになっていくような気がします。みなさんも、バドミントンで、シュッと

風をきってみませんか。

ここに示したように、小学生の作文では「です」の前に助動詞や形容詞を用いていることが多い。もちろん大人の文章では文法的には誤りであるから、中学から高校生になる過程で次第に消えていくはずである。次に、中学生の書いた文章を紹介してみよう。

#### [例文4＝後輩に贈る言葉] (中学1年生)

6年生のみなさん、卒業おめでとうございませう。私は去年の今ごろ、中学生になったら、友達ができるだろうかとか、勉強や、部活のことなどを考えていて、とても不安で、いっぱいでした。

でも、今では友達もたくさんでき、授業も教科ごとに先生が変わり、楽しく授業ができます。

部活も初めのうちは慣れないので、少し大変だったけれど、できなかったことができた時の喜びはとても大きく運動したあとの汗は気持ちがいいものです。悔いのない小学校生活を送ってください。

#### [例文5＝スキー教室] (中学1年生)

いよいよすべる時になって初めはよかったのです。でも、腰はかがめていたのですが、両足をそろえてしまってすべっていたので、スピードがでること、でること……。人をどんどんぬかしていくくらい、ずいぶんスピードがでてしまいました。こわくてがまんできず、「キャーこわい」と叫んでしまいました。いま思うと、すごくはずかしいです。それでもなんとか下にたどりつけました。

このように、例文4では「気持ちがいいものです」と「です」の前に「もの」という形式名詞を置いている。また例文5には、「はずかしいです」という表現はあるものの、「初めはよかったです」

と表現できている。中学生になると、少しずつ文の書き方が変化してくることがわかる。

ところが、こうした小学生特有の表現を大半の学生が続けているところに問題がある。あえて言うなら、「子どもが好き」で「子どもと遊ぶのが楽しくて」という保育科の学生は、小学生の意識から抜け出していないのではないだろうか。

保育科に入学する学生は、例外なくその動機を「子どもが好きだから」と言っている。もちろん子どもが好きでなければ務まらない仕事であることは確かだが、だからといって保育者が精神的に幼児と同じ段階だとしたら問題だろう。

この傾向は、保育科の学生が理論的な教科を好まないこととも符合する。「音・図・体」といった実技系の授業は大好きで、身体を動かし声を出している時は実に楽しそうである。「幼稚園教育要領」や「保育指針」でも、「遊びを通して」保育することはうたわれており、保育現場でこうした実技が重視されることは言うまでもない。

しかし、そうした実技の根底に子どもたちの体や心の発達に対するしっかりとした認識があることで、初めて実技の意味が出てくるはずである。そうでなくては「単なるお遊び」に終わってしまう。その意味で、推量表現がなく、小学生的な表現から抜け出していない点が問題であることを指摘したいのである。

そして四番目の特徴は、主体的に物事に取り組む姿勢が欠如していることを示しているのではないだろうか。少ない兄弟で豊かな「もの」に囲まれて成長してきた現代っ子は、ほしいものはほとんど手にしている。また、「もの」だけでなく、日々の行動や進路の決定も親の指示や意向が強く反映されている。与えられることに慣れきって、努力して何かを求めたこともないのだろう。しかし、現行の「幼稚園教育要領」や「保育所保育指針」では、「幼児の主体性を育てる」ことを重視している。これからの社会をたくましく生き抜くには、自分で問題意識を持ったり考えたりすることが求

められる。そうした子どもを育てるためには、保育者自身に主体性があるかどうか問われるのではないだろうか。

#### 4. 現場の保育者の問題

学生の文章にさまざまな問題があることを指摘したのだが、卒業生はどうであろうか。実習生の指導をしてくださる現場の「先生」の中にも、学生と同じ問題を抱える人が少なくないようである。ここでは、学生の実習日誌に記された実習指導の先生のコメントから文章表現上に問題のある例を紹介してみる。

- \* 今後の実習で、そのことを忘れずに実習に望んでみてください。
- \* 言葉かけはもちろん、時には補助したり難しい部分だけやってあげることもあります。
- \* 挨拶は簡単なことですが、以外となおざりになってしまいがちなことです。
- \* 混合クラスの初日とゆうことで、戸惑ってしまったようですが、子どもたちの遊びや会話にも入れていたようで、よかったです。
- \* でも、今の世の中、人をいい人とお知えられない苦しさがあります。
- \* 子どもの名前を覚え、接極的に話しかけていたので、よかったと思います。
- \* 食べれないから残こしてもよいとすると、周りの子にも影響が出ます。
- \* 日を増すごとに子どもたちへの接し方も慣れ、仕事も責極的にさせていただきました。
- \* 大きい子が小さいこの面倒を見たり小さい子が大きい子に優しくしてもらうことで、兄弟のいない子も大切な時間を過ごすことができます。
- \* 気になったことはどんどん質門していただき、実りある実習にしていきましょうね。
- \* 小さい時から親しんでいれば、低抗なく英語に接することができるようになるのではないのでしょうか。(英語を勉強するからと言って日本語が疎

かでいいとはいえません)

- \*紙芝居を読む前に子どもの気を引きつけられるように、まずは手遊びなどをしてから読んで少し工夫するといいと思います。
- \*子どもに一生懸命語りかけているようすが見れてよかったです。
- \*だれでも最初から完璧にできる人はいませんので、うまくできなかったからといって航海しないでください。
- \*最初は戸惑っていた子どもたちも除々にうち解けて楽しく過ごせました。
- \*元気がよいクラスなので、先生の方も圧倒してしまったと思いますが、子どもたちに負けないくらい元気いっぱいこれから頑張ってください。

実習日誌に書かれたコメントを少し読むだけで、こうした事例は次々に見つかる。卒業したからと言って急に変わるわけではないであろう。卒業生のことは再教育の場を設けるなどの方法が必要だろうが、まず急がなければならないのは在学生の教育をどうするかである。

## 5. 授業での取り組み

推量表現がほとんど見られないことや代名詞を使う学生が少ないことについては、授業中にくり返し指摘することで注意を促している。しかし、授業中に説明しただけでは「自分の問題」として認識することができず、いつまでも間違っただけの表現を続ける学生が少なくないのである。

そこで、宿題として毎時間テーマを示し、次の授業までに400字の作文を書いてくるよう指示している。提出された作文は、問題部分を赤ペンでチェックして翌週に返却する。半期で15回ほどの作文提出になるが、これをくり返すことにより、学生は自分がどんな間違いをしているか確実に気づくことができる。

ただし、原則的には間違いを指摘するだけで、

訂正は学生に任せている。その理由は、教師が訂正してしまったのでは学生が何もしないからである。もちろん、訂正の仕方やなぜ間違っているのかがわからない場合にはいつでも質問を受けることを伝えてある。そして、訂正したかどうかは学期末にそれまでの作文をまとめて再提出することで確認している。また、作文のテーマは、学生が社会の問題に目を向けたり、自分の内面や将来を見つめたりすることができるような内容にしている。

それでは「楽しかったです」についてはどのように対応したらよいただろうか。「楽しかったです」が正しい表現でないことをこれまで何年もくりかえし説明してきたのだが、学生の文章から消えることはなかった。そこで、自分の表現が正しいかどうかをチェックするための方法を考えてみた。

「です」は「だ」と同じ「断定」をあらわす助動詞であり、すでに述べたように、体言もしくは一部の助詞に接続する。そこで、「です」の代わりに「だ」と置き換えてみて文が成り立つ場合は「です」を用いてもよいと「簡易テスター」を学生に呈示した。すると、以前は「楽しかったです」「頑張りたいです」という表現が文法的に誤りであることを指摘しても、半期の授業期間中にそれをなくすることはできなかったのだが、簡易テスターを用いることで、確実に学生の違いを修正することができた。

ただし、「美しいです」は間違っているが、「きれいです」は正しい表現であり、「楽しかったです」とは言わないが、「楽しかったですでしょう」のように、「でしょう」には接続できる。こうしたところに日本語表現の難しさがあり、学生はなかなか理解できないのである。

さらに「推量表現を用いない」ことへの対応として、保育者には洞察力が必要であることと、子どもの心を推し量ることの重要性をくり返し説明している。その上で、作文のテーマとして自分を見つめたり社会に目を向けたりするような内容を

取り上げている。こうすることによって、授業の後半には徐々に推量表現が見られるようになってくる。

授業中に誤りを指摘しても、小中学校時代から身につけてしまった誤字や当て字を改めることはなかなか難しい。すでに述べたように、提出してもらった課題文の間違いをチェックして返却するのはそこに気づかせるためである。文章表現の力をつける方法は、正しく表現された文章を読んで勉強することと、自分で書いて覚えるしかない。そして、もしも間違った表現をした時には、それを指摘してもらうことが不可欠である。

このことに関しては、学生のこれまでの学習の仕方に問題があることが授業中の調査から伺える。「国語の時間に作文の指導を受けたことがありますか」という質問には、83パーセントの学生が「あった」と回答しているが、「自分の文章を添削してもらったことがあるか」という質問には、「よくあった」は20パーセントに過ぎず、「少しはあった」を加えても、やっと50パーセントであり、個別の指導が必ずしも十分ではないことが伺われる。

これは、原稿用紙の使い方・縦書きと横書きの違い・話し言葉と書き言葉の違い・敬語や謙譲語の使い方などの指導にも当てはまる。小中学校や高校時代に基礎的な文章の書き方についての指導を受けたことのある学生は少なくないのだが、本当に理解して身につけるところまでは至っていないのが実態である。

このことは指導方法にも問題があるようだが、それだけでなく、自分の問題として受けとめない学生の問題でもある。「国語表現演習」の授業で、表現方法の説明をすることに加えて毎回課題を提出してもらい、間違いをチェックして返却するのも、教室で説明するだけでは効果が上がらないと感じたからである。学生の書いた300枚近くの作文を毎週読むことには根気と時間が必要であるが、成果は確実に現れてくると言えよう。

## 6. まとめ

保育者をめざす学生にとって、保育の理論や実技の学習が大切であることは言うまでもない。けれども、保育をおこなう保育者自信の問題を忘れてはならない。それは、保育の理論や実技はすべて保育者というフィルターを通して子どもに伝えられるからである。

今回、学生の文章表現を取り上げた理由もそこにある。文章を書くという作業は、表面的には保育活動とは無関係に見えるかもしれない。けれども、保育者にとって重要なことなのである。それは、子どもの発達を保護者と共有するために連絡帳や園だよりを書くという理由だけではない。もっと本質的な部分で、保育者のものの見方をあらわしているからである。文章を書くためには、対象を見つめてその中身を掘り下げなくてはならない。つまり、文章表現力をつけることで子どもの内面を見る目も養われるからであり、保育者の思考力が深められるからである。

その意味で課題文のテーマ設定も、「実習から得られたこと」「ボランティア体験の感想」「卒業後の進路」といった自分自身に関することから、「少子高齢化」や「夫婦共働き」「男女の平等」「虐待」等の社会問題まで、さまざまな問題に目を向けるようにすることが重要だと考えている。

いずれにしても、基礎学力の向上という面だけにとどまらず、文章表現力を高めることは、保育科学生が自分を見つめる力や子どもを見る目を深める上で、きわめて大きな意味を持っていると言えるのではないだろうか。

(注1) 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄『分数ができない大学生』(東洋経済新報社、1999年6月)

(注2) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」(育英短期大学研究紀要第19号：2002年2月)

〔2005年10月28日 受付〕  
〔2005年11月30日 受理〕